
銀時×神威。月の綺麗な夜は違い引き日和

菅原明智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀時×神威。月の綺麗な夜は逢い引き日和

【Nコード】

N6139Q

【作者名】

菅原明智

【あらすじ】

月の綺麗な夜、銀時の前に突如現れた神威。

「やあ、お侍さん。月が綺麗な夜だね」

「……………」

あの吉原の一騒動から、一年くらい。
そいつは唐突に、俺の前に現れた。
につこり、相変わらず不気味なまでの笑顔を携えて。

「そんな警戒しないでよ、なにもしないからサ」

「……………なんでお前がこんな所にいるんだ？ 妹にでも会いに来たのか、このピンク頭」

「んー、それもあるけど……………1番の目的は、お兄さんかな」

そう言うと奴は、橋の手摺りに掛けていた腰を上げた。
また俺を見つめ、楽しそうに微笑む。

川には綺麗な月が映って、ゆらゆらと揺れていた。

「俺に何の用ー？ 銀さん、ガキに構ってやれる程ヒマじゃないん

「だけど」

「酔ってるの？ お侍さん」

「質問に質問で返すんじゃないありません。小学校の時センサーに習いませんでしたかー？」

「やっぱり酔ってる」

勝手に自己完結させやがった、こいつ。
そりゃー銀さん、いままで居酒屋にいたもん。
酔ってて悪いかコノヤロー。

「神楽は元気？」

「毎日卵かけご飯食ってるよ」

「ふーん、そつか」

後頭部を掻きながら、乱暴に言ってみる。
あれ、なにそんなんで納得しちゃってるの。
なに普通に信じちゃってるの。
するとそいつ……神威は、川にそつと視線を落としてから、開き直ったようにからつとした声で言った。

「ま、元気ならいーや」

「オイオイ、なんか無責任だなーコラ」

「だって、全面的にお待さんに任せてるし」

「それが無責任だっつってんだよこのクソガキ。テメエはあいつの兄貴だろ」

……ま、こいつに責任とか言う方が無駄かもしれないけど。
なんとなく、言っちゃいけないこと言っちゃった気がするの、気のせいであってほしい。

「……あいつはもう、俺を兄貴とは思ってないよ」

「……………」

じゃあなんですか。
あいつが兄貴とは思ってなかったら、お前は兄貴じゃなくなるってか。

「……お待さんも、そう思うでしょ？」

「思わねえよ」

神楽と同じ蒼い瞳が、驚きに見開かれた。

この顔……吉原で神楽と再会した時の。

神楽に関する事以外で、ポーカーフェイスは崩せねえってか？

……ん？

なにをイライラしてるんだ、俺は？

兄貴が妹の事を考えるのは普通じゃねえか。

いや……こいつらは普通じゃねえのか。

でも、それでも……なんか、

「……どうして？」

「あ？」

「神楽は……とつくに、俺を兄貴じゃないと思ってるに決まってるじゃないか。神楽を見てて、判るでしょ？」

声のトーンが、低くなった。

こいつのこんな声、弱気な声……当たり前かもしれないけど、初めて聞いた。

知らない内にズキンズキンと痛んでいる胸を、無意識に押さえていた事に気付く。

……飲み過ぎ、たかな。

そんなはずはない、んだけど。

「……つああ、なに言ってるんだろうね、俺。こんなどうでもいい事、気にするなんて……」

なんだ、こいつ。
なんで、こんな……
俺に弱みなんか、見せちゃってんの？
俺を殺すはずだったんじゃないの？

「……神威、」

俺もなにしてんだ。
神威の腕を掴んで引き寄せて、抱きしめて。
なんでこんな事しちゃってんだろ。
はは……訳わかんねえや。
自分を殺すって公言してる男を抱きしめてるなんて、本当に酔っ払
っちゃってるのか俺。

「神威……神威、」

「お……侍、さん……？」

そしてなんでこいつは、涙声？
弱み、見せ過ぎじゃねえ？
あれ……なんで俺は、こんなにも。

「……っ神楽の事、好きなんだろ……」

「っ、」

「口ではどうでもいいって言うてるけど、本当は大切なんだろ。…
…やっぱりお前ら兄妹だよ、そっくりだ」

…ただ、神楽にはこんな気持ちになつた事はない。
可愛くねえガキだけど、ガキらしくてやっぱり可愛い。
それは、親心みたいなもので。
そういうのじゃない気持ちを、俺は今こいつに抱いている。

「意地、っ張りでさあ……」

「……ああ、分かる。あいつ意地っ張りだよな」

「テメエもだよ、このクソガキ」

桃色の頭をぎゅうつと抱え込みながら言つてやると、そいつは黙り込んだ。やがて、ケラケラと笑い声が聞こえてくる。俺の胸に押し付けられて、多少くぐもっている。

「あはは……そっか、俺も意地っ張りかあ」

その声は、どこか……淋しげだった。
それは……妹である神楽を否定したくても、できないような。

こいつにとつたら、断ち切らなければいけない繋がりなのかもしれない。

なんだろう……どうしようもなく、名前を呼んでやりたい。

「……神威、」

「……あり？　なんでそんなに俺の名前、呼ぶんだろうね……？
今更だけどさ、君を殺すって公言してるんだよ、俺」

本当に今更だ、バカ。

そんなの、俺が一番知ってるに決まってるだろ。
狙われてる張本人なんだから。

「テメエみたいなクソガキに易々と殺される程、俺はまだまだ落ちぶれちゃいねーよ。バリバリ現役ナメんな」

「あはは、強いもんねえ、お侍さんは。だからこそ、俺が気に入ったんだけど」

コロコロと笑うこいつが、可愛いと思った。

男が可愛いなんて、末期か……と、自分に苦笑する。

その時、神威の腕が俺の背中に回されて、思わずドキツとする。
何人もの人間を殺してきたはずの手は……冷たくて、でも仄かにあったかくて。

布越しに感じる体温が、ふと愛しくなる。

「……ああ……殺したいなあ、お侍さんを」

「俺の背中に腕回して、物騒なこと言うんじゃないありません」

「ふ……フフ、あはは……」

「……おい、お前こそ酔っ払ってんのか」

「………そーかもねえ」

ぼつり、と呟くように言つて、神威は俺からパツと離れた。
神威を抱きしめていた両腕が行き場を無くし、ぶらぶら揺れる。
きょとんとした間抜けな顔で見つめると、にっこり微笑まれた。

「お侍さんが、あんなに俺の名前を呼ぶからさ」

なんて、言うから。

俺は逆に……酔いが覚めた。

「………っ、神威」

「ほら、また呼ぶ」

につこりと細められた瞳がゆつくりと開かれ、蒼色がちらつく。ちらちら見え隠れする赤い舌が、なんとも官能的――。

さっき覚めたはずの酔い……でもやっぱり、まだ酔ってて。くらくらする。

理性がどこかに行ってしまう。

本能が、這い出てこようとする――。

「……銀時」

「っ、」

俺の名前を繰り返し呼びながら、神威がその場でくるくる回る。何回も何回も、その口で、その声で、紡がれる俺の名前――。

ふ、と神威の足が止まり、俺に振り向く。

悪戯っぽい微笑みが、俺をまつすぐ見つめて離さない。

「……………ね、酔っちゃうでシヨ？」

誘うように言うそいつを、俺は無意識に抱きしめていた。

さっきするっと零れるように逃げられた恐怖感が、今度こそは離したくないという気持ちを煽る。

「…………この、クソガキが。生意気な事ばかり言いやがって」

「……………、そ?。」

悪びれもしない、笑顔。

ム力つく筈のクソガキが、ム力つかなくて愛しく感じるなんて。
俺は本当に、どうにかしちまったのか。

「名前で呼ばれるところなるよって、教えてあげたんだよ」

「んだそりゃ……………それじゃあまるで、」

……………まるで？

まるで、なんだ?……………そう、まるで……………」俺がこいつに名前を呼ばれると嬉しくなるみたいに、こいつも俺に名前を呼ばれて喜んでるみたい……………じゃない、か。

「……………まるで?。」

「あ、いや……………なんでもねーよ」

「ふうん?。」

見透かされ、てる? のか、これは。

コイツに読心術の類があるとも思えねえし、なんの根拠もないのだ

が。

不敵に、綺麗に、微笑むソイツがオレの心にあらぬ事を掻き立てる。

「……嬉しい？」

なんでもないように呟かれた一言に、カアツと顔に集中する熱を感じた。

……やっぱり、読まれてる、みたいだ。

「可愛いネエ、お侍さん」

愉快そうにくすぐすと笑う神威の振動が、抱きしめているオレにまで伝わってくる。可愛いだと、バカ野郎が……可愛いのは、どっちだよ。

「………なんだか、殺すのが惜しくなってくるなあ」

独り言みたいだな、小さな声。でもこんな近くにいる俺には、はつきりと聞こえてきた。さっきから、やけにコイツの声に耳を澄ませてしまう。

「初めて逢った時から思ってたよ。お侍さんと戦うの、楽しそうだった。なにせあの鳳仙を倒したんだからね……。殺したら、さぞ

かし楽しいだろうなあって」

「……俺なんか殺しても、楽しくもなるともねえよ」

「あははっ、確かに、お侍さんがお侍さんを殺しても、楽しくないかもねえ」

当たり前だろ。……でも、さ。なんか、コイツになら殺されてもいいかな、なんて。そんな馬鹿みたいな事が、さっきから頭の中をぐるぐるしてるんだよね。言わねーけど。言えねーけど、そんな変態みたいな事。

「……あ、神楽」

不意に、本当に不意に、ふと呟かれた言葉に、思考よりも身体が先に反応して、神威からさっと手を離れた。

「……なーんて、ネ」

「………！！」

コイツ、嵌めやがった……！ キョロキョロと周りを見回してみても、もちろん神楽はいなかった。てゆーか、全然人気ねえ位だし。なに動揺しちゃってんの俺。ガキに手え出そうとした犯罪者か。

俺の抱擁から解放されて自由になった神威は、くるりと背中を向ける。三つ編みが宙に浮くのを、半ば茫然として眺めていた。

「今日も楽しかったヨ、お侍さん。そろそろ帰るネ。……また、逢いに来るからネ」

「え、あ……おい、神威っ」

「なあに、銀時」

ぐっ……仕返しかよ。しかもまたそんな笑顔で……反則じゃねーのかよ、おいコラ。なにも言わない俺を見て、神威は横顔を向ける。少し寂しげ……に、見えなくもない。

「……これからも神楽を、よろしくね」

「……………っ」

そいつは最後に、またとびきりの笑顔を見せ、帰っていった。神楽は、ちゃんと頼まれてやる、から……早くまた逢いに来いよ、なんて思ってしまう俺は、やっぱり酔っ払い。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6139q/>

銀時×神威。月の綺麗な夜は逢い引き日和

2011年3月13日01時14分発行